

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	坂井 摂子
学位	博士(学術)
学位記番号	新大院博(学)第79号
学位授与の日付	平成27年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
博士論文名	里親養育にみる子育ての可能性

論文審査委員	主査	教授	佐藤康行
	副査	教授	池田哲夫
	副査	准教授	飯島康夫
	副査	准教授	杉原名穂子

博士論文の要旨

本論文の課題は、日常生活における里親による子育ての実態を里親里子の関係性の観点から明らかにすることによって、里親養育が一般の子育ての手がかりになる可能性を探ることである。

これまでの社会学や児童福祉論における里親研究は制度論が中心であり、里親制度が発展しない原因等をめぐって主として議論されてきた。一方で、家族社会学は里親と里子の親子関係を扱ってきたが、関係の危機、問題行動への対処をはじめとする社会化の問題を主に取り上げてきたため、里親養育のよさがかならずしもとらえられてこなかった。本論文は、従来の研究に欠けていた里親が里子を育てる関係性の観点から、里親養育を一般の子育てと比較することによって、里親養育の今日的意義を明らかにし、現代の子育てがかかえている困難さの解消に適用できる可能性を見いだすことを企図している。

構成は以下のとおりである。

序章 課題と方法

- 1章 里親研究の動向と課題
- 2章 里親制度
- 3章 近代日本の里親慣習
- 4章 里親養育に関する意識の変遷
- 5章 現代の日本の子育て
- 6章 里親養育にみる子育て
- 終章 子育てにおける里親養育の意義

序章では、本論文の課題と方法について述べている。これまでの里親研究の中心は制度論

や里子の社会化論であり、里親と里子の関係性それ自体が取り上げられていないことから、これまでデータそれ自体としては収集されていたにもかかわらず、里親養育の意義ないし有効性が発見されていなかった。本論文は、日常生活における里親里子の関係性の観点から子育てをとらえることによって、里親養育のよい側面をとらえることを課題にしている。調査については、半構造化法によるインタビュー調査を採用する旨を述べている。

1章においては、里親養育の研究を詳細に渉猟して本論文の課題を導いている。具体的には、これまでの里親研究は里親制度が発展しない原因等を論じる制度論に集中していたこと、また社会学では里子の社会化や新しい家族を論じることが多かったと整理している。それを踏まえて、従来の研究に欠けていた里親里子の関係性に分析枠組みを設定することによって、里親養育のよい側面を一般の子育てとの比較をとおして浮き彫りにすることを企図したと論文の課題について説明している。

2章においては、里親養育を支える外枠をなしている里親制度の変遷を整理し、変化してきた制度の中身を先行研究を含めて整理している。3章においては、文献を渉猟してこれまでおこなわれてきた里親慣習を検討し、これまで下男や下女のように子どもが扱われてきたという里子に対する誤解を解いている。4章では、里親養育についての一般の人びとの意識に関する調査を広く渉猟し、そこから里親制度を阻害している要因として育児の困難さがあることを浮き彫りにしている。その結果、実子の子育ての困難さが里親委託が増加しない原因のひとつになっていることを見いだしている。

5章においては、現代の子育て研究を渉猟した後、里親養育との比較をとおして里親養育の意義をつかみだしている。現代の学齢期の子育てがかかえる不安・困難さは自分の子どもを他児と比較し、情報の氾濫を背景に勉強を煽るところに由来していることを明らかにしている。

6章では、実際に里親養育している新潟県内の里親について半構造化法によるインタビュー調査をおこない、里親がどのように里子を養育しているのかという関係性の内実を把握している。新潟県で養子縁組里親が多い背景として、家の継承問題が背景にあること、および里子の自主性に任せるかたちで養子縁組が形成されていること、また児童相談所が里親養育において効果的にサポートしていることを特徴として見いだしている。くわえて、里親と里子の関係性には、簡単に甘やかしたり叱ったりしないこと、また子ども自身に決めさせ子どもが自立できるように育てていることを明らかにしている。

終章では、結論として、里親養育の利点、すなわち子どもに自立を求める態度が現代の子育てがかかえている不安・困難さの解消に応用できることを述べ、里親養育が現代の子育てに役立つ意義を指摘している。かくして、ここに里親制度を促進する要因を発見している。

また、大都市と異なり地方では、新潟県の里親に見られるように養子縁組里親が比較的多く、しかも児童相談所が効果的にサポートしていること、また東日本大震災でニーズが高くなった親族里親も重要であることを指摘し、それらを里親制度のなかに包摂しておくことは依然として重要であることを強調している。

審査結果の要旨

本論文のオリジナルな点は、従来の社会学や児童福祉論をはじめとする里親研究が、制度論を主として議論してきたこと、また里親養育の困難さに焦点をあて里子の社会化と家族を論じてきたのに対して、従来にない視点である里親と里子との関係性に焦点をあて、一般の子育てにまで視野を広げて比較することによって、里親養育の今日的意義を見いだした点にある。従来の里親研究にない新しい分析枠組みを採用したことで、新しい発見を導くことができた点は高く評価される。

具体的に言えば、里親養育の利点を説明するため、歴史に遡って文献を検討し従来の里親制度についての誤解を解いたことが挙げられる。また、これまでの里親研究では一般の子育て研究を取り上げることがなかったのに対して一般の子育て研究にまで視野を広げ、一般の子育てがかかえている困難さが他児との比較による親の子への叱責に見られることを明らかにし、里親制度を阻害する要因として一般の育児の困難さがあることを浮き彫りにしたことである。その結果、新潟県の実証研究をとおして里親の自立を求める養育態度が一般の子育てに役立つことを見いだしたことは評価される。

さらに、養子縁組里親が全国一の新潟県内で里親養育の調査をとおして新潟県が養子縁組里親がもっとも多い背景と特徴を明らかにしたこともこれまでの里親研究にはなかったオリジナルな点として挙げられる。

以上より、本論文は博士（学術）に値すると判断した。